

経済学の起源とアウグスティヌス主義

——ニコルからボワギルベールへ—— (下)

米 田 昇 平

目 次

はじめに

1. ニコル—開明的自己愛と政治的秩序—

- (1) ジャンセニスムとニコル
- (2) ニコルにおける人間と社会
- (3) 自己愛の自己抑制と礼節
- (4) 政治的秩序と神慮 (以上前号)

2. ボワギルベール—欲求と秩序— (以下本号)

- (1) ボワギルベールにおける人間と社会
- (2) 富裕の連鎖と消費
- (3) 自然的秩序とレセ・フェール
- (4) 統治論

むすび

2. ボワギルベール—欲求と秩序—

(1) ボワギルベールにおける人間と社会

ルアンの新興貴族の家柄に生まれたボワギルベール (Pierre le Pesant de Boisguilbert, 1646-1714) は、年少の頃、ポール・ロワイヤルの「小さな学校」で数年間学んだ¹⁾。長じてからの彼の「不服従」の精神に、その影響が印されているとされ (Hecht, 1966, p. 134)、さらには「彼は成人に達してからでもジャンセニストであった」と目する向きもある (Perrot, 1984, p. 350)。

確かに、彼の経済学を根底から規定しているその人間観や社会観にはジャンセニスム・アウグスティヌス主義の影響が滲み出ている。アダムスの墮罪後の人間と社会の状況について、彼はいう。

最初の人間において神が全人類に下した宣告は、この人物が罪を犯して後は、将来にわたって労苦と体の汗によってしか生きることも生き続けることもできない、というものであったが、その通りに実行されたのは、世界の未開状態が続いたあいだ、すなわち身分や地位に何の違いもなかったと

きのことにすぎない。そのとき、臣民はそれぞれ自分の僕でありかつ主人であった。そして富や土地の財宝を、それらを利用する個々の能力に応じて享受していた。すべての野心、すべての奢侈が食糧と衣服を手に入れることにかぎられていた。世界の最初の2人の働き手は同時に2人の君主でもあったが、彼らはこの2つの職業を分担した、1人は穀物を手に入れるために土地を耕し、もう1人は身繕いのために羊の群れを養った。そして彼らは相互の交換が可能であったから、これによりお互いの労働をお互いに享受することができた。しかし、時が経つとともに犯罪と暴力が現れるようになり、最も強い力をもった者は神の命令に完全に背いて何も作ろうとせず、最も力の弱い者の労働の果実を享有しようとした。このような墮落は、今日では、人々は完全に2つの階層に分かれているほどに行き過ぎたところまできてしまった。すなわち、何も作らず、あらゆる楽しみを享受する者と、朝から晩まで働いて必要なものをようやく手に入れることができるか、しばしばそれさえ完全に奪われている者との2つの階層である (1707b, p. 979)。

墮罪の後で生じた「未開状態」は墮落してはいるが平和な協働の状態であり、そこでは神が人間に命じた「労働のルール」が維持されている。彼はまたこの状態を、貨幣が導入される以前の「自然法に従って住民同士の関係が単純素朴であった……自然の状態」と呼んでいる (1707b, p. 974)。しかしやがてこうした未開状態・自然状態から離脱して文明状態へと移行するとともに「犯罪と暴力」が現れ、階層分化が生じる。そして金銀貨幣が導入され、それが「自然的用途から逸脱する」とともに「一般的貧困の度合い」が増していく (*ibid.*)。

以上の見方にはジョン・ロックを思わせるものが

含まれているが、基本的にアウグスティヌス主義・ジャンセニスムの人間理解がその根底にあることは明らかである。後でもみるように、富や職業の種類を増やし文明化を進める動因は、何より人間の「魂の墮落」や「虚栄心」であり、人間の経済活動を促す動機もまた、おもに「貪欲に駆り立てられた無分別な魂の墮落」(1707b, p. 1006) にほかならない。さらに文明化に伴って生じた犯罪と暴力こそが階層分化や一般的貧困の原因であった。このようなアウグスティヌス主義に特有のペシミスティックな理解は、ニコルの場合と同様に、生活の便宜、安楽や感覚的享楽に世俗の幸福をみいだして、ひたすらこれを追い求める生身の人間の姿を浮き彫りにし、さらには功利・効用を基準とする功利主義的な富の観念を導いていく。

富とは何か、貨幣を富とみなす俗論を厳しく批判した上で、彼は端的に次のように述べている。

真の富は生活の必需品だけではなく、あらゆる余分品や、魂の墮落が作り出し日々洗練している感覚的嗜好 (la sensualité) を満たしうるすべてのものの十分な享受にある。必需品の過度によってまったく必要でないものを手に入れることができるようになるに依りて、これらはすべてあらゆる身分のものとなる (1707b, p. 985)。

彼によれば、人間の欲求を満たし快楽を増大しうるものは何であれ富であり、喜劇役者の提供する娯楽でさえも生活を彩る富である。そしてこのような富あるいは「豊かさ」の希求は人間の普遍的本性であり、世俗の生活において人々の諸活動を導く主要な動機もそこにある。「富論」の冒頭で彼が述べているのもこのことである。

誰でも豊かになりたいと思う。大部分の人が昼夜を問わず働くのはひたすら豊かになりたいがためである。……富の獲得については、過度によって罪を犯すことなどありえず、またどのような身分の者であれ、大いに所持あるいは獲得してしすぎることは決してありえないと考えられている。他人の利益への配慮などまったくの妄想であるか、空論の域を出ない宗教の考えることである (1707b, p. 973)。

アウグスティヌス主義の立場からみて洗練された富を求めるのは「魂の墮落」にすぎないが、現実の商業社会にあっては、そのような功利的情念こそは「(社会という) この機械を動かす……原動力 (ces ressorts)」(1705b, p. 754) にほかならない。そして他方では、それは文明社会の構成を規定する客観的な要因となりうる。なぜなら、「今日、パン屋からはじまって喜劇役者にいたるまで 200 もの職業が文明の進んだ豊かな国の構成要素となっているが、その大部分の職業が次々と招き寄せられたのはただ快楽 (la volupté) のため」(1707b, p. 986) だからである。支払い能力が高まるにつれて順序だてて支出が増加していくように、必需品が満たされると、次には便益品、上質品、余分品、華美品、そして最後は「虚栄心」が考え出すあらゆる過度の品々が求められていく (1704, p. 834)。洗練された富あるいは快楽を求めて文明社会の構成が高度化していくのである。

しばらく後に、ヴォルテールは、「私悪は公益」という逆説を副題に掲げるマンデヴィルの『蜂の寓話』(1714年) に触発されて、同じように刺激的な詩編をものしたが、そこで彼はアダムとイブの「楽園」を未開社会になぞらえて、これを嘲弄し、古代における質素の美德は貧困ゆえにすぎないとして質素の美德の幻想性を暴きつつ、「私のいるこの場所こそが地上の楽園」と、みずからの奢侈的生活を何の疑いもなく高々とうたいあげた (Voltaire, 1736, p. 139)。ヴォルテールにとっては人間の世俗的幸福は衣食住の洗練による快楽の増大によって得られるのであり、このような洗練された奢侈的な生活こそは文明の証しにほかならない。しかし、ボワギルベールはこのような文明の高度化を手放しで称揚するわけにはいかない。彼にとっては、必需品に続いて華美で余分な品々が求められるようになったのは、「腐敗、暴力、逸楽」が出現して以来のことであり (1707a, p. 888)、洗練の度合いを高めていく文明化の過程は、一方では人間の墮落が深まっていく過程でもあったからである。彼は「富の獲得は……罪ではない」とし、「他人の利益への配慮などまったくの妄想であるか、空論の域を出ない宗教の考えることである」として宗教の羈絆を断ち切るが、しかし他方では、彼が、アウグスティヌス主義

のリゴリズムを引きずっていることは明らかであり、それゆえ、彼は「腐敗、暴力、逸楽」といった「魂の墮落」が文明化を進めるという逆説、言い換えれば人間の悪が結果的に公共善をもたらすという逆説を用いざるを得ない。私欲に従うことは人間の普遍的本性に属するが、しかしそれ自体、墮落であるから、公共善をもたらす人間の行動や動機は（宗教的な）罪ではないとしても（道徳的な）悪には変わりがないのである。ここに、思想的コンテクストを共有するマンデヴィルの「私悪は公益」というあの逆説的議論との類似性をみることは容易である。こうして、彼らの論説にはおのずからシニシズムの影がまわりつくことになる。その後、個人的利益の追求を、世俗の幸福を求めるまっとうな願望に基づくものとみなして「商業の精神」を手放しで称揚したムロン、ヴォルテール、フォルボネの晴れやかな展望と比べて、対照的である²⁾。

人間同士の社会的結合を必然化する原因もまた、このような洗練された富や快樂を求める功利的情念であり、社会はいわば欲求と欲求の、あるいは効用と効用の交換の体系として形成されていく。彼はこの次第を、スミスを思わせる言い方で次のように述べている。

世の中のあらゆる取引は、卸売りであれ小売りであれ、また農業でさえも、もっぱら企業家の私欲(l'intérêt)によって支配されている。企業家は奉仕を行おうとか、取引の相手方に恩義を施そうとか考えたのでは決してなかった。旅人にぶどう酒を売る居酒屋は、誰であれ旅人の役に立とうとしたのでは決してなかったし、自分の蓄えがなくなりはないかと心配しながら旅の足をそこにとどめる旅人にしても事情は同じである。世界の調和をもたらす国家を維持するのは、このような相互的効用(cette utilité réciproque)なのである。各人は自己の個人的利益をできるだけ多く、そしてできるだけ容易に手に入れようとする(1705b, pp. 748-49)。

利益ないし効用の追求に勤しむ合理的経済人の姿でさえここに認めることができよう。ボワギルベールにとって、文明社会はいわば交換を通じて相互的効用の実現される「欲求の体系」であり、利益・効用

を求める人々の様々な功利的行動がこの「欲求の体系」のダイナミズムを導いている。「結局、commerceは相互の効用によって行われるにすぎない」(1704, p. 876)³⁾のである。ペローは、スミスの有名なビール商人の例（「われわれが自分たちの食事をとるのは、肉屋や酒屋やパン屋の博愛心によるのではなく、彼ら自身の利害に対する彼らの関心による。……」）の源泉は、前章でみた貪欲に駆られて旅人の面倒をみるニコルの「宿屋の主人」であり、しかもこの例は、一方で、上述のボワギルベールの「居酒屋(le cabaretier)」の例に受け継がれている事実を指摘した(Perrot, 1992, pp. 344-45)。ペローは、スミスの有名なフレーズの源泉をニコルにみいだすとともに、社会的な結合原理を利益にみる見方に関して、スミスとボワギルベールの想源は同じであると考えたのである。このように自己利益の実現のために他者の利益に寄与するという利益の相互性の観念、言い換えれば「利益による秩序」の観念を彼らは共有していた⁴⁾。ただし、ニコルは自己愛の自己抑制のメカニズムの析出によって「利益による秩序」の可能性に着目したが、ボワギルベールにとっては、利益の相互性を保証するのは自己愛の道徳的かつ欺瞞的な自己抑制ではなく、神慮という名の市場の強制力のほかにはない。この点は後で詳述しよう。

ところで、彼は「誰でも豊かになりたいと思う」としながら、しかし他方で、労働者は「必要に迫られないと働かない」(1704, p. 874)から、例えば穀物価格の低落による実質賃金の上昇は労働者の労働意欲を減退させるにすぎないとし、「豊かさへの願望」は労働者には無縁だと考えた。このような労働者観は、彼の論述にときおり顔をみせる蔑視的な大衆観と裏腹の関係にあり(1707a, p. 934)、ここに「人民の弁護士」(1707a, p. 947)を自任するボワギルベールの、生産者大衆へのアンビヴァレントな感情を読み取ることさえできる。このような労働者観はマンデヴィルも同じであり、労働者に対するこの伝統的な固定観念が隘路となって、富裕を求めるあらゆる人々の意欲に導かれて進展するはずの「欲求の体系」は、マンデヴィルの場合と同じく、みずから貫徹しうる道筋を閉ざされてしまうのである。

(2) 富裕の連鎖と消費

ボワギルベールは、人間の欲求を満たしうる富を「土地の富 (les biens en fonds)」と「勤労の富 (les biens d'industrie)」とに分類する。このうち土地の富が基本的かつ優越的であって、勤労の富はこれに従属する。文明化が進むためには農業生産力の拡大によって余剰が増大し、勤労の富やそれを生産する職業の種類が増えていく必要がある。初期未開の時代には3、4種類しかなかった富や職業が今日では200を数えるまでにいたったのも、農業生産力の拡大の結果にはかならない(1707b, p. 986)。ところですでにみたように、富の種類が増加するとき、そこにはおのずからなる順序がある。必要品から始まって過度の余分な品々まで、人間の欲求は必要度の高い財からより低い財へと向かうからである。したがって職業についても、パン屋や仕立屋のような最も必要な職業から、奢侈の最後の産物であり過度の余剰の存在を表す喜劇役者にいたるまで、必要度に応じて、順次、世の中に登場することになる(1707b, p. 988)。こうして、文明社会はより洗練された富あるいは快樂の享受に向けて、いわば序列化された「欲求の体系」として形成されていく。

農産物余剰の増大に導かれ、新たな快樂(欲求)を満たすために新たな職業が次々に生まれ、分業と交換のシステムが拡大して経済社会の構成が高度化していくが、このシステムの特徴としてボワギルベールが繰り返し強調するのが、それを構成する諸要素の相互依存の関係である。ニコルは「あらゆる技芸は鎖で結びつけられており、お互いに必要とし合っている」(1671c, p. 215)と述べたが、ボワギルベールはこのような生産部面の相互依存をとくに「富裕の連鎖」と呼んでいる。

ある職業が姿を消せば、どのようなものであれ、他のあらゆる職業に直接にあるいは間接的にただちにその害悪を及ぼさずにはすまない。あらゆる職業は全体として数々の輪によって構成される富裕の連鎖(une chaîne d'opulence)をなしており、1つでも輪がはずれてしまえば全体が無効になるか、……あるいは少なくともきわめて不完全なものとなる(1704, p. 830)。

また、他方で地主などの有閑者と生産者も相互に依

存し合っている(1707b, p. 989)。さらには、彼はこのような経済主体間の機能的相互依存ばかりか、空間的(地方と地方、王国と王国)、時間的(不作の年度と豊作の年度)な相互依存にも着目している。要するに、彼によれば、経済社会を構成する諸要素は何であれ相互に依存しあっており、「過剰に持っているものをお互いに援助し提供しあい、欠乏しているものをその交換に受け取る」(1707a, p. 891)ことが不可欠なのである。こうしてこの社会は、人々を交換の連鎖によって結びつける交換社会として特徴づけられることになる。

このような諸要素の相互依存の全体を維持するために、相互の過不足を調整するあらゆるレベルのcommerce(取引・交流)が円滑に機能しなければならない。彼が多用する「釣合(la proportion)」や「均衡(l'équilibre)」の概念もまた、過不足を調整するための持続的な交換という不断の運動状態を意味しており、富や「一般的富裕」はこのようなダイナミックな調整過程を通じて実現されていく。こうして、ニコルがいう、貪欲によって維持されるcommerceの社会は、いっそう明確に、相互依存の円滑な機能によって相互的効用が実現される交換社会として捉えられている。ボワギルベールは「したがって、富は人と人、職業と職業、地方と地方、王国と王国との不断の混ざり合いのなかからのみ生まれるのである」(1707b, p. 991)と述べているが、運動状態を表す「不断の混ざり合い」という表現に、ニコルの場合と同じくデカルトの「渦巻き」、すなわち利益を求める情念の重層的な渦からなる動態のイメージが投影されているとみることができよう。

ボワギルベールは、以上のような生産者同士の相互依存(「富裕の連鎖」と生産者と地主との相互依存の二重の関係を、貨幣循環ないし消費購買力の循環(所得の循環)の視点から捉え直し、乗数効果をも含めて、地主の土地所得からの支出を起点とする経済循環の存在をはっきりと認識している⁵⁾。この循環を維持するための条件は何か、彼によれば、それは安定的な需要によって農産物価格が必要な水準を維持することである。「余分品の職人は彼に生活費を提供してくれた人(地主)の所有するみずからの必要品を買い、それによって農業者の物産の価格を支える、このように価格が維持されてはじめて農

業者は自分の主人に支払うことができ、主人はこの職人から買うことができるようになる」(1707b, p. 988)、という次第である。職人は地主に余分品(勤労の富)を売って得た収入(勤労所得)で農業者から必要品(土地の富、地主の所有物として扱われている)を購入するが、この需要によって農産物価格を支えることで土地所得を実現し、地主にふたたび余分品に対する購買力を与えるのである。こうして土地所得と勤労所得は農産物価格を介して常に相互に依存し合っており、そこに循環的な相互依存関係が成立している。この関係において地主と勤労大衆も相互に依存し合っており、地主はこの循環のいわば「仲介役」にすぎない。

ところで、この消費循環は、その形成のあり方に即して動態論の視点がそこに組み込まれるとき、経済の螺旋的な拡大ないし収縮の過程を示すものとなる。小麦価格の低落による土地所得の減少によって惹起された不況の局面について、彼は次のように述べている。

……支払われない土地所有者は何も買うことができない。その影響は最初、余分品に及ぶ。その後も混乱が続けば、人は次第に少しずつ上でみた段階(必要度)に応じて支出を控える。すなわち余分品を生みだしたのは富裕であり、富裕とは本来的に土地の果実にほかならないから、土地の果実に生じた価値の下落はあらゆる余分品を道連れにするのである。そして、こうした変化は余分品にとどまらず便益品や有用品にまで及び、さらに影響はただちに伝播し、あらゆる職業に及ぶから、この変化は最初から、いくつかの階層や仕事が生み出す最も必要なものにも打撃を与える(1704, pp. 837-38)。

また、耕作費用を補償することができないほど小麦の価格が低下するとき、パンの値段が下がったことを喜ぶのは大衆の浅慮にすぎず、状況は「雪だるま式に悪化」していく。

喜劇役者は、他のすべての人々と同様に天の特別の恵みによって——彼はそう信じているのだが——彼の1日の消費分を1ソルで手に入れることができるほど、パンをきわめて安く得られて喜

ぶ、2ソルかかればそのような喜びは得られない。しかし彼は不幸にもそうすることで自ら墓穴を掘っていること、そして仲買人も土地所有者も借地農によって費用や給与を支払われないから、……節約せざるをえないことを知らない、そして余分な職業である喜劇役者は真っ先に、一日働いても1エキュを稼ぐこともできなくなるだろう、なぜなら彼が1ソルでパンを買うことを望み喜んだからである。驚くべきことに、その後は喜劇役者であれ芝居を見に行く人であれ、お互いに危機を脱しようと考えて、事態をさらに悪化させ、お互いの破滅を早めるような行動をとる。……富裕なときに毎日芝居を見に行っていた人は収入が減れば、……収入に生じた減少を支出の減少で埋め合わせようとして週3日しか行かなくなってしまう。一方、喜劇役者の方も……毎日肉を、鶏肉さえも食べていたとすれば、同じように食費を切り詰め、ご馳走を食べる日を半分にしてしまう。穀物価格の低下のほかにもそのような事態によって、芝居を見に行っていた人の借地農や家畜を売る借地農はいっそう主人への支払いが困難となり、喜劇役者の存続も危うくなる。……こうした事態は彼らがお互いにそれぞれの職を解雇しあうまで続くが、そうなれば国家および君主は絶対的に破滅する。……ほかのあらゆる職業についても同じことがいえる(1707b, pp. 989-990)。

こうして経済はいわばデフレスパイラルに陥り、螺旋的な収縮過程をたどって「もときた道を逆行していく」(1704, p. 838)。相互依存の拡大をもたらす動因は「魂の墮落」あるいは「快楽(*la volupté*)」(1707b, p. 986)であるが、そのプロセスを主導した地主の所得が減少すれば、それを契機に消費循環は波及的に縮小を余儀なくされる。ニコルのいう「相互的な諸必要(諸欲求)を通じて」お互いに結びついた連鎖は、消費・消費欲求の収縮とともに縮小していくのである⁶⁾。なお、ボワギルベールによれば、このように経済が収縮過程に陥り、商業手形などが信用を失う経済危機の局面では「貨幣は真っ先に求められるか、あるいは求められる唯一のものとなる」(1707b, p. 987)、すなわち、不況時には生活の必要から「労働者であれ所有者であれ……、これらのあらゆる臣民は将来の収入の減少が確実であ

るとみれば、その分だけ支出を、したがって貨幣の持ち出しを減らしてしまう」(1704b, p. 969)。不況時には貨幣は紙券の持たない価値保存機能を発揮し、これにより上にみた購買力の連鎖あるいは消費循環の収縮に拍車がかかるのである。

生産に対する消費・消費欲求の規定性に着目するこのような消費主導論が、人間と社会に関する彼の功利主義的な見方の延長線上に展開されたものであることはいうまでもない。そこにニコルの見方との連続性、あるいはもっと一般的に、18世紀の功利主義の源流となった17世紀後半のフランスの新思潮との親和性をみいだすことができよう。思想的源泉を同じくするマンデヴィルとの類似性が浮き彫りにされるのも、この点においてである。マンデヴィルにとっても、洗練された文明社会の分業と交換のシステムはもっぱら奢侈的欲求・消費に支えられており、自負心、虚栄心、強欲などの悪徳に由来する消費欲求・需要こそが社会の繁栄の原因であるから(「私悪は公益」)、人々がこの消費を控えて儉約に努めれば、このシステムは立ち行かなくなる。自負心や奢侈が国内から追い払われれば、「トランプ札やさいころの製作者だけでなく……呉服商や家具屋や仕立屋やそのほか多くの者も」半年で餓死するであろう(Mandeville, 1714, p. 85/80)、という次第である⁷⁾。彼らはともに社会を「欲求の体系」と見立て、「私悪」によるのであれ「魂の墮落」によるのであれ、人々の諸欲求が経済社会のダイナミズムを導く原動力であると考えた。それゆえ、高度に洗練された(あるいは腐敗した)文明社会において、人々の相互的な諸欲求を通じて緊密に結び合った諸要素の連鎖を維持するのは、何より消費支出に用いられる貨幣の循環的流通(消費循環)であるから、消費・消費欲求の減退によってこの循環が収縮すれば、このシステムはたちまち立ち行かなくなるのである。

ボワギルベールにとってフランス経済が陥っている苦境がまさにそれである。すなわち、税制の欠陥により消費が「半減」してしまったため、土地生産物の価格は下落し、その余剰も減少し、フランスのあらゆる所得が減少してしまったとされる(1695, p. 589)。過少消費によって消費と所得の循環が収縮し、過小生産が生じたという見立てである。不況を貨幣の欠乏のせいにする俗論に対しては、貨幣は

「消費の僕」(1707b, p. 1004)にすぎず、必要なのは潤沢な貨幣ではなく十分な消費であるとして、税制改革によって過少消費が解消されればおのずから貨幣の流通は活発化し、それだけ多くの所得が生みだされると反論している⁸⁾。苦境を脱するために何より重要なのは過少消費の原因を取り除くことであり、そうなれば循環的な相互依存の歯車はふたたび噛みあって、消費→生産(所得)→消費→…の連鎖の拡大とともに過小生産は解消されていき、やがて「事物はふたたび自然の状態に復帰する」(1695, p. 582)であろう。このような消費主導論に現代の有効需要理論の先取りをみることができる。ボワギルベールが目にした危機的状況は、まさしく過少消費によって生じた不完全雇用均衡であり、完全能力産出量の水準(「自然の状態」)を実現するために、政策的に(この場合、税制の改革によって)消費需要を増大することが必要であると考えられたのである。

過小生産を解消するために彼が期待したのは、大衆の消費購買力である。循環的な相互依存のもとで、地主などの有閑者の経済的機能はほかの消費主体と無差別であるから、問題は、一般消費水準に及ぼす量的な影響は有閑者と大衆とでどちらの方が大きいかということである。生産者大衆は社会の圧倒的部分を占め、しかも生活に余裕がないから消費性向は有閑者よりも断然大きい(「国家により多くの所得をもたらすのは零細な人々である。1エキュは貧民の手元に1日あれば、豊かな人々の手元に3ヶ月とどまる場合よりもより活発に移動し、したがってより多くの消費を生み出す」1695, p. 621)。しかも、彼らの消費対象はおもに必需品とりわけ農産物であるから、次に述べる農産物の比例価格——この維持こそが経済の全機構の礎石である——は彼らの支出に支えられている。彼らの勤労所得からの支出によって農産物の比例価格とくに穀物の比例価格を維持することが、土地所得を安定的に確保するための必須の条件であった。

税制の欠陥に由来する過少消費の状況は、彼にとっては統治者が自然的秩序に無知なために生じた混乱であり、この意味で「自然への暴力」の結果であった(1695, p. 644)。他方で、彼は、同じく穀物価格を低水準に導くことで経済を縮小均衡に陥れた要因として、穀物の自由流通を阻害するコルベル

ティズムの統制政策を槍玉にあげている。前者は自然的秩序に沿った具体的な施策のあり方にかかわるのに対して、これは社会における自律的な自然的秩序の成立条件にかかわる。そしてそこで問われたのは、諸要素の相互依存のシステムあるいは消費と所得の循環の安定化の条件は何かという問題である。彼によれば、この条件を満たすために「奇跡を行うことが問題ではなくて、必要なのはただ自然の働きに任せることである」(ibid.)。自己愛に発する貪欲はいかにして社会秩序を維持しうるか、という前述のニコルの問題提起に対し、ボワギルベールはレセ・フェールの秩序原理を提示して答えるのである。

(3) 自然的秩序とレセ・フェール

交換における「相互的効用」を実現し、交換の連鎖を安定的に持続するためには、交換当事者は誰もが等しく相応の個人的利益を保証されねばならない(1704a, p. 830)。彼によれば、このような利益の均等なバランスすなわち調和が実現されるかどうかは、もっぱら「比例価格 (un prix de proportion)」(1707b, p. 993) の実現にかかっていた。比例価格とは、生産費との関係で、また他の財価格との関係で釣合を維持した「ぎりぎりの価格」である。

しかし比例価格の実現は容易ではない。なぜなら、この経済世界は「みずからの幸福をこうした調和の維持に期待するほかないのに、恐るべき魂の墮落によって朝から晩までそれを破壊しようとして全力を尽くさない者など誰もいない」(1707a, p. 891) ほどに、人々は強く自己愛(利己的情念)に支配されているからである。買い手は売り手に損をさせようとするばかりか、売り手の持っているものは何でも手に入れようとする、「それほど利益が人々の目を曇らせてしまうのである。……商人は貪欲のままに振る舞うとすれば、宗教や同胞愛とは関係なく、喜んで自分の個人的利益のためにすべてを犠牲にしてしまうだろう」(1704, p. 831)。前にみたように、ニコルは自己愛の自己抑制のメカニズムに着目して道徳的自律の可能性を論じたが、ボワギルベールにとっては、利益を求める自己愛には歯止めがない。この場面では合理的な経済人は想定されておらず、有閑階級は不合理な貨幣愛(「貨幣崇拜」1707b, p. 981)によって貨幣と財とのバランスを損ない墓

穴を掘らし、大衆もまた無分別に自己利益を追い求めるばかりである。ボワギルベールは、このような剥きだしの自己愛を抑止するためには、自然や神慮の強制力すなわちその「剣の切っ先」に頼るほかないという。

これらの場合に正義が維持されるのは剣の切っ先によるほかない。自然や神慮が引き受けるのもその役割である。……自然は人がその働きに任せるかぎり、最も力の強い者が貧しい者の物産を買うときに、この販売によって貧しい者が自分の生計を得られなくなるほどに、この強者が意のままに力を振るうことができないような秩序(un ordre)を設けた。……自然の働きに任せるかぎり(que pourvu qu'on laisse faire la nature)、すなわち自然に自由を与え、誰であれ自然を保護し暴力を排除する目的以外にはそれに介入しないかぎり、このような秩序が維持されるのである(1707a, pp. 891-92)。

正義を維持するこの「剣の切っ先」は、暴力装置を内包し背反を処罰しうる政治権力を意味してはいない。それは自己愛を強いて抑制させうる市場の強制力のことである。

自然あるいは神慮だけがこのような正義(市場の利益の平等な分配)を遵守させることができる。……自然や神慮は何より、買い手の場合も売り手の場合も利益の願望だけがあらゆる市場の魂であるという仕方で、あらゆる種類の取引において売ることと買うことの必要を等しくする。このような均衡とバランスのおかげで、売り手も買い手も等しく道理を聞き入れ、道理に従うことを余儀なくされるのである(1707b, p. 992)。

彼が述べているのはこれだけである。彼は価格を決定する要因としてアナウンスメント効果や需要と供給の強度(動機の強さ)に着目するほか、生活必需物資の小麦とそれ以外の財とでこの強度が異なり、価格変動のあり方が異なることに注目するなど、興味深い価格理論を展開したが、スミスのようには価格形成メカニズムそれ自体について詳細に論じたわけではなかった⁹⁾。しかし、彼が暗黙裏に、

自然あるいは神慮という名の市場の強制力によって利益を求める個々人の利己的情念が相互に調整され、比例価格の成立に至るなんらかの自己調整作用の存在を想定していたことは間違いない。人為を排除し「自然だけが設けることのできる必然的な秩序 (la police)」(1704, p. 874) に任せておけば、交換における「正義のルール」が維持されるのである。そして秩序形成の原動力は、すでにみた富や「豊かさ」を希求する人間の功利的情念の自由な運動にほかならないから、この意味で「自然の働き」に任せるとは、事実上、人々の利己心 (利益追求) の自由に任せることを意味している。彼はいう、「……あなたやあなたの仲間が口を出さないことだ、そうすれば万事はきわめて順調に運ぶであろう、なぜなら金儲けの熱意は自然なものであって、人々を駆り立てるには個人的利益以外には動機が必要ないほどである……」(1705b, p. 795)。利己心の自由は「競争心」を刺激し「利益の願望」を自己調整するとともに、一般的富裕という公共善を実現する。

事物がこのような均衡の状態にあるかぎり、どんな身分であれ、豊かになるためには仕事ぶりや熟練の点で隣人に対して力を尽くすほか方法がない、それは隣人の物産を安値で手に入れようとして彼を欺くためでなく、手腕において隣人をしのぐためである。このような競争心が、他の仕方で豊かになることなどできないという理解を通じて一般に広まれば、あらゆる技芸は完成され、富裕はありうる最高のレベルに達する(1707b, pp. 986-87)。

このように、市場における競争が利益を求める利己心を強いて公益へと導く。彼はいう、「誰でも日夜みずからの個人的利益によってみずからを養う。そして彼らのほとんど考え及ばぬことだが、そうすると同時に一般的利益を形成する、彼らは否応なく、常にこの一般的利益からみずからの個別的効用を期待しなければならない」(1707b, p. 991)。ここに彼なりの「自然的自由の体系」の構想をみいだすことができる¹⁰⁾。ファッカレロは、ボワギルベールにおいて秩序原理としての「競争」がニコルやドマの「開明的自己愛」に取って代わるとして、ここで「ニコルやドマやジャンセニスムのあらゆる伝統が一挙

に乗り越えられている」と述べている (Faccarello, 1986, p. 224)。

以上のようにボワギルベールの場合、相互的利益 (利益による秩序) は自己愛の理性的な自己抑制によって保証されるのではなく、市場の強制力によって維持される。そしてこのためには、利己心の自由に基づいて「競争心」が発揮されうるようにレセ・フェールの体制が確立されなければならない。この点で彼が強調したのが、commerce の自由であり、とくに穀物取引の自由化であった¹¹⁾。穀物価格はあらゆる所得の源泉である土地所得を規定するほか、他の財価格にとっての基準価格でもあり、穀物取引の自由化によって需給のフレキシビリティを確保して穀物の安定的な比例価格を実現することは、何より重要な課題であったからである。

(4) 統治論

前章でみたように、ニコルは社会秩序の最終的な拠りどころを神慮に基づく政治的秩序に求めた。これに対し、レセ・フェールの秩序原理を提示したボワギルベールは政治の役割をどのように考えているだろうか。

まず彼は、主権者としての君主を中心に、高位高官たちが主権の行使にあたる絶対王政の上意下達の統治原理そのものに異議を唱えたわけではないことに注意する必要がある。ただ、彼らは思弁を弄するだけで実践に通じない、そこを追従者たちにつけ込まれ、個人的利益にのみ腐心する彼らの口車に乗せられて政策を誤ったにすぎない、と彼は繰り返し述べている。このような過誤を、絶対王政の統治原理それ自体に内在する欠陥に由来するものとは決して考えていない。三部会が凍結され、高等法院が君主に対する「建言権」を失い、実情に通じない地方監督官が選ばれるなど、統治機構を担う高位高官たちと生産者大衆とが遮断され、政策立案のための正確な情報が集まらなくなったことが、そのような過誤を招いた原因であるとするのである (1707a, pp. 917-18)。「個人的利益しか念頭にない人々は大臣閣下を籠絡して国王にも人民にも不利益な布告を手に入れた」(1695, p. 587) という次第である。パスカルやニコルの場合もそうであるが、批判の矛先は絶対王政の統治原理それ自体に向けられたものではなかった。

しかしながら他方で、彼は自然的、自律的な経済

秩序の存在を確信し、君主の絶対権力といえども、この秩序に背反することは許されないと考える。なぜなら、この秩序が維持されて初めて人民の利益あるいは一般的富裕が実現され、したがって君主もまた最大限の利益を得ることができるからである。それゆえ絶対主義的統治は自然的な経済法則によって制約され、レセ・フェールを統治原則としなければならない。権力あるいは政治の役割は、「自然への暴力」を排除するという自然的自由の機能を補完することにかざられるのである。すなわち、「(十分すぎるほど巻かれた) 独楽に対するように扱う必要がある。激しく動いているときはそれに触れてはならない、だが倒れそうにみえるときにはただちに手助けを与えてやらねばならない」(1705a, p. 708)。利子率や為替相場が権力の意図とは無関係に市場での需給の比率に左右されるなど、権力の行使は一定の経済法則に規定されることは認識されるようになっていたが、しかし、ボワギルベールはこのような部分的なレベルを突き抜けて、経済への権力の介入は全体として限定的でなければならないと主張するのである。彼は、洗練された富や富裕を求める功利主義的な人間と社会の目標は、絶対主義的な政治の介入によってではなく、自律的な経済秩序の尊重によってのみ実現されるとすることで、彼自身の意図を超えて、封建的な政治的、社会的諸制度の存在理由を奪ったばかりか、政治それ自体の領域をも大幅に縮小してしまったといえよう。こうして、ニコルの場合とは異なって、ボワギルベールにおいて身分制に立脚する秩序維持装置としての政治的秩序は事実上、空洞化し、君主と臣民とを直接に結びつける上意下達の絶対主義的統治機構だけが、しかもその役割が著しく限定された形で残されることになる。

また、すでに述べたように彼にとって文明化の過程は人間性の墮落が深まっていく過程であり、しかもニコルの場合とは異なって、自己愛は自己抑制の契機を欠いているから、道徳的自律の可能性は完全に排除されている。彼は、生産者大衆であれ有閑者であれ、彼らにどのような道徳的自己抑制をも期待しないのである。ジャンセニストのニコルが規範力としての社会道徳の存在を認めているのと比べて、むしろボワギルベールの方がアウグスティヌス主義の人間理解に忠実である。それゆえ、ここでは富と徳の関係は最初から問題にならない¹²⁾。ボワギルベ

ールにとって、経済社会は経済主体の剥きだしの利己的情念がぶつかりあう社会であり、「超越的権力」としての神慮は、あらゆる市場において片時も休むことなく、まさに「剣の切っ先」によって情念の対立を調整しなければならない。こうして「利益による秩序」ないし自律的な経済秩序を支える唯一の抑制装置として市場の強制力は絶大であり、逆にいえば、利己的情念に導かれる人々の経済行動を秩序づけることができるのはこの強制力だけであるから、必ずしもこれに服さない有閑者の利己的行動はいつでも経済秩序を攪乱しうる。生産に直接関与せず、不労所得を支出するにすぎない有閑者の自己愛にはこの強制力は十分には及ばないからである。それゆえ、絶対主義的な上意下達の意志決定機構や地主などの有閑者の存在は、常に経済秩序への攪乱要因となりうるであろう。こうして絶対王政下のフランス社会の現実に、自然的な経済秩序の観念を当て嵌めようとする彼なりの「自然的自由の体制」の構想は、おのずからその脆弱性を露呈せざるをえない。

むすび

ニコルは、自己愛をほとんど唯一の行動原理とみなすアウグスティヌス主義のペシミスティックな人間理解に基づいて、商業社会のなかで洗練された富や快樂を求めて生きる人間のリアリティを捉えた。そして自己愛による愛徳の偽装という欺瞞のメカニズムを析出して、「利益による秩序」の可能性や他者の眼差しへの意識がもたらす心理的抑制の効果を描き出し、自己愛という悪が世俗社会を維持する秘密(「錬金術」)に迫ろうとした。ただし、社会秩序の最終的な保証は、統治者が神慮に基づいて案出し維持する力づくの政治的秩序であったから、この意味で、人々の功利的行動は、宗教・政治の規範力によってしっかりと繋ぎとめられていた。

これに対し、ボワギルベールは人間の功利的行動が織りなす自律的な経済秩序の存在を浮き彫りにした。すなわち、社会的結合システムとしての循環的相互依存のシステムに内在する市場の強制力という自己愛の対立を調整しうる安定化装置の働きによって、おのずから一定の社会秩序が生まれるとすることで、まったく新たな地平を切り開いたのである。彼によれば、直接的な政治の強制力や道徳的な自己

抑制を必ずしも必要とせずに、利己的情念の自由はおのずから一般的利益を形成し、一定の自己実現を遂げることができる。道徳的秩序の可能性を排除し、もっぱら彼が「剣の切っ先」と呼ぶ市場の強制力に依拠しようとしたことは、むしろ彼の秩序論の脆弱性を表すものでもあったが、しかしともかくも、彼は超越的権力としての市場機構の作用に着目し、政治や道徳の範疇からの経済世界の規範的な独立を論証しようとした。さらに、注目すべきは、ボワギルベールが思想的コンテクストを同じくするマンデヴィルと同様に、消費欲求の本性に着目し、それを社会（「欲求の体系」）の一構成原理とするなど、消費主導の経済ビジョンを描いたことである。彼のレセ・フェールの原理がニコルからの飛躍だとすれば、このビジョンは、功利主義の源流とも目されるニコルの論説の延長線上に位置している。このことによって、単なる政策論ではなく秩序原理としての構成を備えた経済学という新興科学が、早い段階においてどのような性格を纏っていたかを知ることができる。

改めていえば、ニコルやドマが向き合ったのは、自己愛に基づく人間の功利的情念はいかにして秩序と両立しうるか、という「情念と秩序」あるいは「欲求と秩序」の問題であり、アウグスティヌス主義のコンテクストに即して別言すれば、自己愛という悪はいかにして公共善へと転化するか、という問題であった。コンテクストを同じくするボワギルベールは、しかしニコルとは違って、宗教の軛を振り払い、飽くことなく富や「豊かさ」を求め、際限なく快楽や消費欲求の充足を希求することは人間の普遍的本性であって、決して罪ではないと考えた。この決定的な飛躍の上で、ボワギルベールはアウグスティヌス主義にとって必然的なこのパラドックスを、レセ・フェール（あるいは自然的秩序）の秩序原理によって解き明かそうとしたのだといえる。ジャンセニストのニコルは、世俗化に向かう時代精神が産み落した悲観的な人間と社会の真実の姿を抉りだしたが、ボワギルベールはこの延長線上で、いわば功利主義のリアリズムに徹し、そこに立脚しつつ、富裕の科学としての経済学の創成に向けて前例のない大きな一歩を踏み出したのである¹³⁾。

注

- 1) 彼はやがてパリに出て法律を学び、弁護士の資格を得た。当初はギリシャ文学の翻訳や歴史小説を発表するなど、文学によって世に出ようとしたが、容れられず、1667年に郷里に戻った。そして1678年にモンティヴィリエ子爵領の判事職を購入し、次いで1690年にルアンの初審裁判所司法総監の職を購入した。一時的な中断はあったものの終生この職席にとどまり、1714年10月10日に没した。彼はこの間、ルアンでM. de S. という匿名で『フランス詳論』(*La Détail de la France*, 1695) を出版し、作家としての経歴を始めた。1707年には、この『フランス詳論』と、これを引き継ぐ『フランス弁論』(*Factum de la France*, 1705年ないし1706年に単独で出版されたともいわれているが、現存しない)に、さらに「穀物の性質、耕作、取引および利益に関する試論」(*Traité de la nature, culture, commerce et intérêt des grains*…)と「富、貨幣および貢租の性質に関する論考」(*Dissertation sur la nature des richesses, de l'argent et des tributs*…)の注目すべき2論考などを加えて、『現世治下のフランス詳論』(*Le détail de la France sous le règne présent*, 2 vols.)を匿名で出版した。この自選著作集の第2巻の最後に収められた *Supplément du Détail de la France* (直前に単独で秘密出版されたともいわれている)が当局によって問題視され、ヴォーバンの『国王10分の1税案』とともに発禁処分となり、彼はルアンから6カ月の追放に処せられた。ボワギルベールの経歴等について、詳しくはHecht (1966)を参照されたい。なお本稿では、INED版のボワギルベール著作集(Boisguilbert, 1966)を用いている。
- 2) 単純化していえば、人々の集合的精神における世俗的価値の優越という世俗化のトレンド(エピクロス主義)を背景として、ニコルやラ・ロシュフコーのペシミスティックなアウグスティヌス主義は、ボワギルベールやマンデヴィルのシニクなエピクロス主義に転化し、これがさらにムロン、ヴォルテール、フォルボネなどの啓蒙の功利主義に引き継がれていく、ということになる。
- 3) ロスクラッグはボワギルベールの経済学について「世俗のトレンドに影響を受けた改革者たちのなかで、功利主義の哲学が経済理論の発展にいかん影響を与えたかを示すこれ以上の例を考へてみることは困難であろう」(Rothkrug, 1965, p. 16)として、その功利主義的な性格を強調している。
- 4) ラフォンは「バスカル、ニコル、ラ・ロシュフコーといったジャンセニストのアウグスティヌス主義からベールやマンデヴィルのカルヴィニストのアウグスティヌス主義を経て、スミスの経済学に至る興味

深い連続性が存在する」(Lafond, 1996, p. 187) としたが、ここにみられる功利主義的な人間観や社会観に関するニコル→ボワギルベール・マンデヴィル→スミスの継承関係は、そのような「連続性」を例証しているといえる。

- 5) 詳しくは、米田 (2005), 13-14 頁を参照されたい。
- 6) 以上から明らかなように、ボワギルベールの相互依存はワルラス的な「すべてがすべてに依存する」という無時間的、関数的な相互依存ではない。それは循環的、因果的で、順序づけられた相互依存関係であり、決して事後的な集計量の世界を意味しない。
- 7) マンデヴィルに関しては、とりあえず米田 (1995) を参照されたい。
- 8) 彼はいう、「物産に富んだ国で十分な所得を生み出すには、貨幣が潤沢に存在することは必ずしも必要ではない、ただ十分な消費の存在が必要だけである、そのような十分な消費が存在する場合の 100 万リーブルは、消費がなされない場合の 1000 万リーブルよりも大きな効果をもたらす、というのはこの 100 万リーブルは 1000 回も更新され、その運動の度にそれだけ多くの所得を生み出すからであり、また金庫に眠っている 1000 万リーブルは石ころ同様に国家の役に立たないからである」(1695, pp. 619-20)。したがって、税制の改革によって「一瞬にして 5 億リーブル以上もの消費の回復が可能であれば、それだけ貨幣の流通が生じるであろう。その分、新たな貨幣を投入しなくてもそうなる」(1707a, p. 954)。
- 9) ボワギルベールの価格理論について、詳しくは米田 (2005), 22-32 頁を参照されたい。
- 10) 彼はいう、「自然の自由に任せさえすれば、そのあらゆる権限を回復して、自然はただちに商業を再建し、あらゆる物産相互の価格の釣合いを回復するだろう。これにより、あらゆる物産は決して止むことのない流転によって、不断にお互いがお互いを生みだし、お互いに維持しあって、各人が自己の労働と地所に応じて手に入れる富裕が一般にわたって形成されるだろう。そしてこの一般的富裕は常に増大に向かい、これらのあらゆる源泉の元である土地がもはや提供できないところにまで達するから、土地であれ何であれ、あらゆる事物が自然のなしうるかぎり有効に利用されたとすれば、どれほど豊かな富を目にすることになるだろうか、と想像してみることができる」(1707b, p. 1007)。
- 11) 彼は農産物の輸出入関税の引き下げを唱えるばかりでなく、製造品の原料の輸入と製品の輸出に対する高関税が国内製造業（帽子製造業、トランプ、タバコパイプ、紙、鯨ヒゲなど）の不振と職人たちの国外流出を招いたことを指摘している（ただし、外国製造品の輸入関税については言及していない）。こ

の意味で彼が農産物（小麦や葡萄酒）の輸出入の自由化ばかりか、製造品の輸出の自由化なども念頭に置いて高関税政策を批判したことは明らかだが、それが外国製品の輸入の自由化をも含む全面的な自由貿易の主張であったかどうかは、判然としない。いずれにせよ、彼が強調しているのは生産や労働の自由というよりも商業ないし流通の自由である (1695, p. 614)。彼にとって最も重要なのは穀物の比例価格の実現による「釣合」の維持であり、このために政府が補助金を与えて穀物輸出に介入するイギリスのあり方をたびたび称賛させている。この意味で、具体的な政策論のレベルでは彼の主張は単なる自由放任に帰すわけではない (1707a, p. 920)。

- 12) ボワギルベールの秩序論において、秩序維持機能の一端を担うべき道徳的規範の存在が想定されていないから富と徳の関係は問題になりようがないが、徳を論じたニコルやマンデヴィルの場合でも、いわゆる「富と徳」を対比的な概念として設定し商業社会の有り様を評価する問題軸とすることはできないであろう。アウグスティヌス主義の人間理解に立つ彼らにとって、徳は偽装された悪徳にほかならず、この意味で富と徳は自己愛ないし利己的情念という同じ源泉に発するからである。
- 13) 18 世紀を通じて、商業社会（文明社会）の進展に伴って世俗化するわち経済優位のトレンドが勢いを増して伝統的な価値規範との相克がいつそうあらわになっていく。ボワギルベールやマンデヴィル以降の 18 世紀の経済学・経済思想は、そのような歴史的状況を前に、アウグスティヌス主義のリゴリズムを完全に払拭しつつ、彼らが拠り所とした、私欲に従うことを人間の普遍的本性とみなす功利主義的なリアリズムと、一方でその対抗力であり続けたストア主義的な、あるいはシビック的な理想主義とのせめぎ合いのうちに展開していくことになる。マンデヴィルが惹起した奢侈論争の展開にその様相がよく現れている。

引用文献

- Boisguilbert, Pierre le Pesant de (1966), *Pierre de Boisguilbert ou la naissance de l'économie politique*, 2 vols., Paris, INED.
- (1695), “Le Détail de la France,” in Boisguilbert (1966), t. 2, pp. 581-662.
- (1704), “Traité de la nature, culture, commerce et intérêt des grains...,” in Boisguilbert (1966), t. 2, pp. 827-878.
- (1705a), “Mémoire sur l'assiette de la taille et de la capitation (manuscrit inédit),” in Boisguilbert (1966), t. 2, 663-740.
- (1705b), “Factum de la France, contre les demande-

- urs en delay...,” in Boisguilbert (1966), t. 2 , pp. 741-798.
- (1707a), “Factum de la France” in Boisguilbert (1966), t. 2 , 879-956.
- (1707b), “Dissertation de la nature des richesses,” in Boisguilbert (1966), t. 2 , pp.973-1012.
- Faccarello, G. (1986), *Aux origines de l'économie politique libérale: Pierre de Boisguilbert*, Paris, édition anthropos.
- Hecht, J. (1966), La Vie de Pierre Le Pesant, seigneur de Boisguilbert, in Boisguilbert (1966), t.1.
- Lafond, Jean (1996), “De la morale à l'économie politique, ou de La Rochefoucauld et des moralistes à Adam Smith par Malebranche et Mandeville,” *Da la morale à l'économie politique*, Dialogue Franco-Américain sur les Moralistes Français, Actes du colloque de Columbia University (1994), Textes réunie et présentées par Pierre Force et David Morgan, Publications de l'Université de Pau.
- Mandeville, B. (1714), *The Fable of the Bees: or, Private Vices, Publick Benefits*, with a Commentary, Critical, Historical, and Explanatory by F. B. Kaye, 2 vols, Oxford, 1925 (泉谷治訳『蜂の寓話 私悪すなわち公益』法政大学出版局、1985年).
- Perrot, J-C. (1984), “La main invisible et le Dieu caché” in *Une Histore intellectuelle de l'économie politique (XVIIe-XVIIIe siècle)*, Paris, 1992.
- Rothkrug, L. (1965), *Opposition to Louis XIV, the Political and Social Origins of the French Enlightenment*, Princeton, Princeton University Press.
- Voltaire (1736), “*Le Mondain*,” in Morize, *L'Apologie du luxe au XVIIIe siècle et <Le Mondain> de Voltaire*, Paris, 1909 (Genève, Slatkine, 1970).
- 米田昇平 (1995) 「奢侈と消費—マンデヴィルとムロンを中心に—」『下関市立大学論集』第38巻第3号。
- (2005) 『欲求と秩序—18世紀フランス経済学の展開—』昭和堂。